

# 安全はすべてに優先する

末端ユーザーのニーズに合わせて製品展開

株式会社 小森安全機研究所

昔に比べ減ったとはいえ、プレス現場での労働災害は依然、年間900件近くある。安全装置とその周辺装置メーカーである賛助会員の小森安全機研究所（埼玉県越谷市、小森明彦社長）を訪ねた。「安全はすべてに優先する」は創業以来、同社の合言葉だ。



小森 明彦社長

**一景気は100年来の非常事態といわれていますが、御社ではいかがですか。**

売り上げは昨年と比べて10%強落ちています。昨年11月ごろから世の中がガタガタしましたが、12月はその割に落ちなかった。新年に入って成人の日の連休までお休みする会社はかなり多かった。あれ、どうなっているのかなといった感じがとても強かったですね。連休が明けてちょっと世の中が動き始めた感じもあったのですが、しかし動きは淡い。銀行再編劇があったころの不景気とはちょっと様子が違います。業種的には、医療関係や玩具、育児用品など子供の用品を作っているところとか、忙しくしているお客様も結構多い。自動車関係でも全部駄目なのかというと、そうでもなく、良いところもあって、まだら模様です。

**一このところの安全装置市場の需要動向は如何ですか。ピークは過ぎた？**

ひところのように作れば売れる時代ではありませんが、しかし、プレスの災害は未だゼロでない。欧米に比べて遥かに多いと聞いています。安全装置を使わないとか、安全装置が壊れていたとかという原因が多いようですが、何か安全装置が原因で事故につながっているようで、どうも釈然としないものもあります。また、安全措置がないための事故もかなり多いといわれていて、安全装置メーカーとしては、まだまだやらなければならないことは沢山あります。一般にプレスのクラッチ型だけで安全装置を簡単に決めてしまう傾向があ

りますが、これだと使いやすい安全装置は生まれてきません。やはり作業の内容を十分に観察して、作業内容に合わせた安全装置を選んでいかなくてはならない。専用化された作業では単一の安全装置でも対応できますが、汎用化された作業（抜き、曲げ、絞り、大物加工、小物加工など）では、安全措置も複数必要になるのです。われわれが研究しなくてはならない分野はまだ豊富です。

**一御社の事業構成は？**

安全装置、プレス周辺装置、特定自主検査の3本柱で、100%安全関係です。安全装置は光線式、安全囲い、静電容量式、ゲートガード式など、あらゆる安全装置を取り揃えています。売り上げの半分くらいを占めています。

特定自主検査は罰則の伴う動力プレス機械の法定検査で、必ず年1回やらねばならないものです。当社は第3者機関として、安全装置の点検を含めたプレスの特定自主検査を年間1万台ぐらい実施しています。

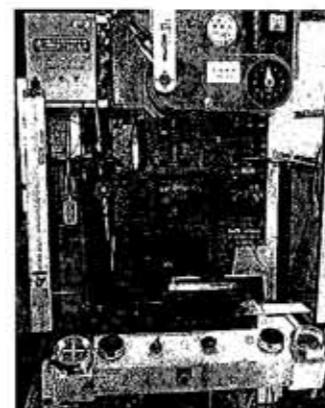
**一プレス周辺装置にはどんなものがありますか**

例えばロードモニターと呼ばれる荷重計。成形荷重を波形として捉え、プレス機械のオーバーロードを防いで、適正荷重による不良率の低減など、品質管理には欠かせないセンサーです。

制御機能付き光線式安全装置「テクノアイ」は当社が業界に先駆けて開発したPSDIシステムで、検定品として認められたのも当社が最初です。プ

レスを安全装置で起動させ、生産性と安全性を両立させています。

静電容量型の「タッチスタート」は反復繰り返して作業用の作動スイッチとして開発しました。在来の両手押しボタン式に比べ、作業者の負担を大幅に軽減でき、腱鞘炎などの職業病予防にもなります。もちろん作業効率も上がります。従来、作動スイッチは一定の重さで押さないものは安全装置として認められなかったが、当製品は検定品とお墨付きを得ました。



作動スイッチ「タッチスタート」

**一お墨付きでないと販売できない？**

売買は出来ますが、安全装置とは認めてもらえません。安全装置は規制の中で生きています。しかし、規制の中でやっている限り、新製品は生まれません。新製品はその規制を打破しないと出来ないから、役所と打ち合わせをして新しい製品を認めもらうことが肝要になります。当社は業界に先駆けた新製品が結構多いのですよ。

**一といたしますと？**

安全装置はプレス機械メーカーにとっては周辺装置です。主はプレス本体ですから、安全装置は構造規格の枠内でよい、なるべく安いものということになります。ところが、エンドユーザーに行きますと、安いものより使いやすいものをといわれます。当社の新製品はこのようなエンドユーザーの要望、現場のニーズの中から生まれてきます。

**一安全装置の今後の展開についてお聞きしたい。**

今年6月までに構造規格と安全装置規格が変わると聞いています。平成13年度に見直し委員会

（産業安全技術協会）の最終報告が出て久しくなりますが、こんどは先ず間違いのないでしょう。構造規格が変わるといえることは、それ自体、それを作っているメーカーが新しい規格に合わせなければならぬということだけですが、新しい安全基準ができれば、ユーザーも新しい規格に則った安全対策を進めていくこととなります。そうすると安全を先取りする企業では古い安全装置から新しい安全装置への買い替える需要が発生してくると思われれます。また、今回の改正で新たに加わるプレスブレーキの安全装置は、これまでは安全補助装置でしか販売できなかったものが、お墨付きのある検定番号のついた安全装置として供給できるようになります。プレスブレーキは大きな事故はありませんが、指先を怪我する事故が多いだけに、新しい需要が期待されます。ぜひ、ご注目ください。

**一日金協のeラーニングによる労働安全マネジメント普及促進事業がスタートしましたが…。**

安全装置もそうですが、先取りの安全、予防保全の活動として重要な事業だと思います。社内だけで行う安全教育だと、刺激がなくマンネリ化しがちですが、これであればインターネットにさえつながれば、会議中でも行える、Q & Aもできる、外部の新しい事例も検索できるし、システムのスパイラルアップにつながると思います。特に地方の企業にとっては移動時間や交通費などを勘案すれば、とてもいいシステムだと思います。インターネットは課金が難しいようですが、メンバーシップ制なので上手くいくんじゃないでしょうか。

**一最後に御社の企業理念をお聞かせください。**

プレスの災害をなくすというのは創業者である故小森武彦の執念でした。その創業者の遺志を引き継ぎ、「安全はすべてに優先する」をモットーに、よりプレス作業に安全な製品を世に送り出すことによって、労働災害の撲滅に寄与することが当社の使命だと考えています。（文責 編集室）